

第1章 経験的性格の信仰か組織制度偏重のそれか（2）

（続き）

今日、精神科医の中には、神信仰は統合された健全な人格のために欠かせない、と書いている指導者もいる。政治家は政治家で、神に立ち戻つてのみ 我が国の生活様式を保持しうる、と唱えてやまない。科学者たちもまた 言っている、我々の文明を存続させたいなら 精神的転換が不可欠だと。こうして、我々のこの時代、「神を抛りどころとすること（turning to God）」が、すなわち信仰へと回帰することが起ってきた。

宗教的特質への近年のこうした傾倒を典型的に示した漫画が最近、出た。描かれているのは、聖職者の装いをした一人の男性。襟の折り返しに（キャンペーンボタンと呼ばれる）大きなバッジが付いていて、「神様支持（I like God）」と書かれている。⁹⁾ 神様、一票獲得である。実際、投票をしたら、アメリカ人の大多数の票を、神様は獲得することだろう。人々は「神様が好きで、神様を支持している（like God）」からだ。とはいうものの、「神を信じているという この信仰（this belief in God）」がはたして 事柄に対する人々の関わり方に影響を与えるかということ、事の大小を問わず、そうした影響はさして認められないのが大方と言えよう。たしかに、圧倒的に多くの者たちが、神を信じている、と 口にはする。しかしながら、アーデイス・ホイットマン（Ardis Whitman）¹⁰⁾ は次のように指摘する。「自らの生活をするうえで 神のことを考えてそうすることなどないし、神のことを思っただけで行動することもない、と 4人に3人が認めている」。⁹⁾ こうして、神に従うあり方とその時々、社会的慣行とが両立しがたいとき、後者がほぼ例外なく、人々の取る道となる。

つまり、我々は分からなかったのである。我々が回帰したのはいわば「宗教（religion）」にであって、キリスト教の信仰にではなかったということが。いわゆる信仰復興と思っていたものが実は「宗教的な（religious）」それであって、一義的には キリスト教信仰のそれではなかったということが。神は単に、我々に心の安らぎを与えるためにいるのでもなければ、我々の生活様式を守るためにいるのでもない。ましてや、我々の文明を救うために存在しているわけではない。そのことを、教会のメンバーは一般に理解していないと言えよう。エドモンド・ペリー（Edmund Perry）¹¹⁾ も言うように、「キリスト教の信じる神は、我々の言うがままに要望に応じてくれる ホテルのボーイのような存在ではない。そのようにして、我々の虚しさを満たし、願望を叶えてくれるような存在ではない。そうではなく、我々が神に仕えるのである。我々は神の国の民であり、そこで主に仕える者であって、神に招かれるとき、我々はその務めをなす」。¹⁰⁾ したがって、神がその民に、現代社会の悪や不正を根元的に断つことを求められるとき、また 昨今のキリスト教を飲み込んでしまった「現状順応の時流（cult of conformity）」と大胆に決別することを求められるとき、単に宗教的というのでなく まさしくキリスト教信仰に立つ者であれば、これに従う以外に選択の余地はなかろう。神に仕えるべきは我々のほうであって、我々をもてなすために神がおられるのではない。

今日 ^{こんにち} たしかに、アメリカ人の多数がいずれかの教会のメンバーとはなっているが、だからといって、皆が神に仕え、その御心を「天になる如く、まさに同じように 地においても (on earth even as it is done in heaven)」なしているかという、そうも言えまい。実際、労働組合をはじめ、製造業の協会や専門職の会といった ^{みどころ} 自らが属する組織のほう ^{ごと} が、その態度や価値観、行動の行方 ^{ゆくえ} にはるかに大きな影響を及ぼしていると言えよう。現実問題、こうした諸関係のほう ^{みずか} が通常、所属の教会以上に 人々に忠誠を要求し、これを獲得しているのである。

社会は近年、教会に、現下の社会規範に自身を快く合わせることを期待し、教会もまた、これに応じる態勢にあるのが普通となった。教会とこの世との、また神の民とこの世の人々との区別は大幅に後退した。人々が教会に加わるとき、その多くが ^{みずか} 自らの積極的関与を最小限にしてそうするし、教会からの期待もまた、ごくわずかでしかない。

数的成功を求める諸教会は入会を勧誘しようと、その有りようをいかにも ^{あら} 露わにしている。にこやかに ^{ほほえ} 微笑む牧師と握手さえすれば、教会への入会はそれで十分、と。こうして、教会はその扉をあまりに安易に開け放ち、本来ある その潜在力を喪失する。・・・仕える者となるように、と求められる人はほとんどいない。誰もがしきりにそうされるのは、所定の封筒一式を使って 献金をするように、ということである。キリスト教信仰を生きる者がいなくなった。皆が「宗教的 (religious)」になったからだ。¹¹

こうした状況が現今の教会の日常に存在するというのは、なぜなのだろうか。そこには 疑いもなく、幾つもの理由があると思われる。例えば、キリスト教の信仰とは別の理由で教会に ^{つな} 繋がっている人々も少なくない。イエス・キリストへの自身個人の献身に基づいてというより ^{もつば} むしろ、専ら 実利的理由から教会に加わった人たちがいる。公立学校の教師は、現地の教会員になれば、その地域社会により容易に受け入れてもらえることを知っている。保険会社の人間は人間で、教会の活動に積極的に加われば、良い商売になることを知っている。ジョン・P. マーカンド (John P. Marquand)⁽¹²⁾ の小説『敬具 ウィリス・ウェイド (Sincerely, Willis Wayde)』に出てくる主人公は若いやり手の役員で、新たな地域に異動するが、そこでするのが地域社会の教会に加わることであり、そのようにして 教会員の一人ひとり全員を口説いて勧誘しようとする。つまり、

ウィリス・ウェイドは全く世俗的な人間で、そもそもキリスト教の信仰とはどんなものなのか、これっぽっちも分かってはいない。けれども、やり手の若手役員として 他社の同様な者たちがすでに入り込んでいる郊外の地に移ってきたからには、その地域社会のプロテスタント教会の一員とみなされるのが望ましいことは知っているのだ。¹²

他方また、教会に属してはいるものの、しかしそれは 現代人の基本的欲求を個人的に満たす程度のもので、それ以上のものではない人もいると言えよう。すなわち、所属の欲求であり、仲間の人間の一人と認められて受け入れられたいという欲求である。たしかに、イザヤやエリヤ、アモスといった人物に、賛嘆の思いを ^{いだ} ぼんやりと抱いてはいるかもしれない。しかし、これら「主の熱狂者

たち (zealots for the Lord) 」がいったいどんな者たちだったのか、それについては本当のところは知らないのが事実でもある。だとしたら、こうした人にとって、イザヤ以下の預言者たちのように他の人々の前で周囲に追従しない態度を示し、妥協しない立場を堅持するというのはとても考えられることではあるまい。所属の要求があまりに大きく、受け入れられたいとの要求があまりに強いからである。こうして、人々のキリスト教は近年、往々にして、真剣な献身の伴わない、真の内的確信に欠けた、心からの実存的決断がうかがえない〔そのような類いの〕宗教的なものになっていると言えよう。存在の核にまで及ぶべきものが、そのようにしてこれを激しく揺さぶり これを新たにすることは、生活の表面を擦る^{なす}だけで終わっている。しかも、自^{みづか}らを信仰的と感じる偽らざる思いが それでもなお、上手^{じょうず}に生み出されているのである。かくして、宗教的なものが、信仰の根元的な求めに対し、それから自身を守るために当てがう 一種の防護役となっていると考えられる。¹³

キリスト教は〔本当に〕組織制度偏重に陥りつつあるのか

こうした状況を注意深く観察する者は、昨今のキリスト教を複雑な思いで見ている。一方では たしかに、数的成功を示すしるしが多くの点で数々認められ、それを見るにつけ、まさしくうれしい思いにさせられる。未来会者や未信者への心からの思いも、また純粋な献身と奉仕の姿もそこかしこで見受けられ、うれしいかぎりである。しかし 他方また、ほとんど絶望の淵^{ふち}にでも落とされるような思いにもさせられかねない。というのも、しかるべき洞察をもって事態を見ると、近年の信仰生活には同時に、気がかりな兆候があることにも気づかざるをえないからである。すなわち、形式や外見^{がいけん}、組織制度といったものの偏重に傾く兆候がそれである。

信仰の実践においては〔言うまでもなく〕、良^よきも悪^あしきも 長所も欠点も、そのいずれもがどんな時も常に存在する。教会が最高の状態にあっても、欠点^{あら}が露わになることがあろうし、最悪の状態になっても、そこにもなお 何かしら良きものが残されているものである。したがって、本書は以下に記すキリスト教の現状分析をもって、信仰の理解と保持、実践をめぐる 我々の現在のあり方がすべて誤っていると言うものではない。そうではなく、問題は、我々がこの間^{かん} 知らずのうちに、新約聖書が教える信仰の本質的精神と活力から逸れ、そのようにして、それらを失いかけているということがあるのかどうか、ということである。そして、その結果、我々は今や単に、新約聖書の信仰を象徴する形式を幾つか 外面的に守っているにすぎないと言いうるのか否か、ということなのである。

昨今のキリスト教の状況をどう評価するかについては、もちろん、違った見方を強調する人々もいる。曰く、「我が国でキリスト教が流行^{はや}って、何か悪いことでもあるのか」と。「・・・1950年代が信仰に熱かったことを喜ぼうじゃないか。我々は今、我々がアメリカに神が風を吹かせ始めておられるのを目にしているが、我々の世代がその風に乗って進むなら、人類の歴史上 最も記念すべき神の御業^{みわざ}の一つを見ることが出来るやもしれないのだ」。¹⁴ 現在のキリスト教が新約聖書のそれと違^{たが}わぬと思う人は、あるいは そのしかるべき^{にすがた} 似姿^{にすがた} と思う人は、こうした考えに同意するにちがいない。そして、このような見解を抱く人たちは、本書のような書物は教会にはふさわしくなく、これに資

するより、これを害することのほうが多いと感じることだろう。我々は批判を止め、「掻き乱して波風立てるの（rocking the boat）」を止める必要がある、と。今あるキリスト教を後押しして広めるため、我々は一緒になって、持てる力をすべて注がねばならないと思っているからである。

しかしながら、他方もし、現在 目にしているキリスト教が概して 新約聖書のそれと同じではなく、それを部分的に真似たにすぎないものとしたら、さらにはそれさえ 一部の外的形式のみをもってそうしているとしたら、はたしてどうであろうか。現下のそうしたキリスト教をそのまま続けることは、そうする我々の上に神の裁きをもたらすことにもなりかねないのではなかろうか。かくして、次の問いにいかにかに答えるかによって、キリスト教の現状をどう捉え、これにどう向かうかが決まることになる。すなわち、「新約聖書の信仰の本質、核心とは、いかなるものなのか」との問いである。そして、この問題について探求し、考えうる答えを提言するのが まさに、本書の一つの目的となっている。

第一に、「組織制度偏重主義（institutionalism）」という言い方で 信仰における何が意味されているのか、そのことを検討せねばなるまい。それは 当然ながら、組織や制度それ自体を闇雲に非難するものではない。キリスト教においても、その信仰を整った仕方で十分に広めるためには、どちらも必要で望ましい手立てと言えよう。一般に運動に類するものを考えるとき、それらは参加者を得る効果的な手段となる。また、教育や学習を通して 賛同者に案内や助言、指導を行なう仕組みを提供してくれる。さらには、課題が大きく複雑すぎて 個人単独では扱えないとき、それらが効果的に協力する手立てとなって、賛同者らがそれをグループで達成するのを可能にしてくれる。これらからしても、運動が制度も組織的仕組みもなしに生き長らえるのは、いかなるものであれ、およそ不可能と考えられる。だとすれば、運動が抱く価値観を組織制度なしに十分に広めるなどということは間違いなく不可能と言えよう。このように、組織や制度は、本質的・本来的に悪というものではない。それどころか、それらはしかるべき運動において常に、その有効かつ重要な一部となっている。

ならば、「組織制度偏重主義（institutionalism）」とは 何を意味するのか。それは すなわち、信徒の主たる結びつきが、生ける神にではなく、むしろ制度としての教会や、またその諸組織に向けられたとき、そのキリスト教は組織制度偏重に陥る、ということである。そこでは、神との深い精神的・霊的繋がりに押し出され、そこから 自由で自然な信仰生活がなされるわけではない。それよりも、組織制度偏重のキリスト教にあってはむしろ、各人の信仰はまずもって、そこに出席して 組織をどれだけ支えるかという仕方で、また献金をして 教会をどれだけ支援するかという仕方で示される。そして、一般論としては、ただ単に「立派な（good）」生活をするというかたちで表わされることになる。

こうしたことが今日、傾向として現実に認められるか否かについては たしかに、それぞれの知るキリスト教の教会や諸団体によって その判断が異なることもあれば、また評価に用いるその基準によって それが違って来る部分もあるかと思われる。このような主観的とも言える問題で厳密さを確保するのは 事実上、できようものではあるまい。しかしながら、自身の結論として、研究者の一人⁽¹³⁾ は次のように記している。

諸教会の公式会員数の約半数が一ひよっとすると、その数は2/3に及ぶやも一神やその教えに自ら直接結ばれているのではなく、むしろいわば宗教的に組織〔としての教会〕に繋がっていると考えられる。プロテスタントの信仰理解からすると、驚くべき事実である。ローマカトリックの組織制度主義的性格に反発して生まれたプロテスタントの教会がその後、1960年代に至って、その教会員の大勢が組織の活動を指向するようになるとはなんと皮肉なことである。

15

こうして、教会が内向きになり、その関心を自身にばかり向けるようになるとき、キリスト教は組織制度偏重に陥ると言えよう。つまり、そのために建てられた自らの使命以上に、自身の存続と発展により大きな関心を寄せたときである。ヘンドリック・クレーマー（Hendrik Kraemer）⁽¹⁴⁾ は、このようなことが今日まさに教会で起こっているとして、以下のように述べている。

教会それ自体が内向きなのである。そして、世間一般にもそのように思われている。それは何世紀にもわたって教会に培われてきたもので、それがため、教会の人たち自身にとって自然に感じられることであり、世間の人々にとっても同様である。・・・教会の関心が、何にも増して、それ自身の増大と安寧に向けられている。それは〔組織制度としての〕教会中心的なあり方である。そして、自己中心的でもある。^{16、(15)}

プロテスタントの諸教会が福音の届けられていない一般の人々に無関心でなく、心を寄せてきたのは確かで、間違いない。我々も実際、日曜学校の在籍者数を20年足らずで2,000万人増加させており、まさしく我々の誇りとするところとなっている。教会員の増加も同様で、誇るべき一因と言えよう。がしかし、まさにこの伝道の働きが一それはたしかに、この世におけるキリスト教の宣教にとって、その根元的部分を成すものではあるが一あまりに多くの場合、「組織制度」としての教会の成長に貢献するだけのものとなっているようにみえてならないのである。教会が本気でこの世界を変えようとしてきたようには思えないからである。我々はまた、伝道して教会員とした人たちについても、世界を造り直す積極的な器となるよう、彼らを導いたとは思えない。

実際、牧師をはじめ教会の人々によって数多の活動がなされているが、その根底にある主な動機の一つは、教会という組織制度を建て上げ、これを大きくすることにあると言えよう。そして、そうすることが、当事者らの思うところ、「神の御心をなすこと（doing the will of God）」と同一視されるに至ってもいるのである。このように言って誤りでないことは、教会の牧師やスタッフが日常的にどんなことを尋ね合っているか、それを見れば見て取れよう。「お宅の日曜学校は今、在籍どのくらい？」「去年のバプテスマは何人だった？」「あなたのところの教会予算、どれくらいかね？」といったぐあいである。こうした現実を、ジョン・W. マイスター（John W. Meister）⁽¹⁶⁾ は次のように述べて批判している。「組織制度と化した教会は、人々が真に必要としていることに応えるよりも、またこの世界を変革するよりも、その組織制度自体を強化することにより大きな関心がある。そうした状況下では、牧師の職務というのは、プロモーターとしての仕事がそれになる」¹⁷

(続く)

注

1. *Yearbook of American Churches for 1961* (New York: National Council of the Churches of Christ in the U.S.A., 1960) 264, 279.
2. Gibson Winter, *The Suburban Captivity of the Churches* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1961) 30.
3. Martin E. Marty, *The New Shape of American Religion* (New York: Harper Bros., 1959) 15.
4. Claire Cox, *The New-Time Religion* (Englewood Cliffs NJ: Prentice-Hall, Inc., 1961) 1-2.
5. A. Roy Eckardt, *The Surge of Piety in America* (New York: Association Press, 1958) 43.
6. Will Herberg, *Protestant, Catholic, Jew* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1955) 89-90.
7. *Ibid.*, 108.
8. William H. Whyte, Jr., *The Organization Man* (New York: Simon and Schuster, 1956) 254.
9. Ardis Whitman, "What Not to Tell a Child about God," *Reader's Digest* (February, 1962): 81-82.
10. Edmund Perry, *The Gospel in Dispute* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1958) 16.
11. Marty, 117.
12. Paul Hutchinson, *The New Ordeal of Christianity* (New York: Association Press, 1957) 113.
13. Herberg, 276.
14. Quoted in Eckardt, 158.
15. Winter, 100.
16. Hendrik Kraemer, *A Theology of the Laity* (London: Lutterworth Press, 1958) 127.
17. John W. Meister, "Requirements for Renewal," *Union Seminary Quarterly Review* XVI (March 1961): 254-55.

訳注

- (1) アメリカのプロテスタント神学者。1916～2002年。シカゴ大学神学院教授、プリンストン神学校教授等を歴任。教会と社会の問題を中心に論じた。
- (2) [] 書きは、訳者の補筆挿入。
- (3) アメリカのジャーナリスト。
- (4) アメリカのプロテスタント神学者。1918～1997年。米国宗教学会会長、リーハイ大学宗教学科科長等を歴任。特にユダヤ教とキリスト教の関係について、アメリカを代表する論者の一人となった。

- (5) ユダヤ系アメリカ人の宗教社会学者。1901～1977年。ドルー大学で教鞭^{きょうべん}を執った。
- (6) 使徒言行録に「(この) 道」という表現で繰り返し出てくる「主の道」のこと。「わたしは道」(ヨハネ 14:6) と言われたイエス自身の言葉をも示唆。
- (7) アメリカのプロテスタント・キリスト教史家。1928年～。元・シカゴ大学神学院教授。とりわけ、近代アメリカキリスト教史の学者として著名。
- (8) アメリカの社会学者、評論家。1917～1999年。社会や組織と個人の関係について、特に文化的圧力の観点からこれを考察したことで知られる。
- (9) 選挙運動などで使われる丸いプレート。候補者の名前や写真、スローガン等が印刷されていて、支持者が胸などに付ける。"I/We like ... (私/私たちは・・・が好き)" "I/We love ... (私/私たちは・・・が大好き)" とはすなわち、「・・・支持」「・・・熱烈支持」^{じょうとう}の常套フレーズ。
- (10) カナダ生まれのアメリカ人執筆者。1905～1990年。社会問題、人間関係、教会、宗教等について数多く論じ、長年にわたって『リーダーズダイジェスト』の寄稿者も務めた。
- (11) アメリカのプロテスタント神学者、宗教学者。1923～1998年。ノースウェスタン大学の宗教学科創設に尽力。長年にわたり、学科長を務めた。キリスト教にとどまらず、仏教をはじめ世界の主要宗教について研究し、論じた。
- (12) アメリカの作家。1893～1960年。ニューイングランドの生活を風刺した作品で知られる。1938年、フィクション分野でピュリッツァー賞を受賞。
- (13) 前出(1)のギブソン・ウインター (Gibson Winter)。
- (14) オランダのプロテスタント宣教学者。1888～1965年。信徒の神学的・宣教論的位置づけを論じて著名。以下の引用文は、その代表的著作の一書 *A Theology of the Laity* (邦訳『信徒の神学』) より。エキュメニカルな運動にも尽力した。
- (15) *A Theology of the Laity* は『信徒の神学』との書名で邦訳が出されているが (小林信雄訳、新教出版社、1960年)、ここでは、エッジの引用原文から私訳を行なった (邦訳書では、153～154頁に訳出)。
- (16) アメリカの合同長老教会牧師。1916～1974年。合同長老教会神学教育協議会事務局長、同・キリスト教教育協議会委員、プリンストン神学校理事等を歴任。関連分野の専門誌に多数寄稿した。

(矢野 眞実訳)